

鎌倉時代絵巻物のつまらなさ(下)

藤田経世

では、それぞれの主な作品について、どこがどうつまらないかを、見てゆくことにしよう。

まず、古典文学を主題とした作品であるが、紫式部日記絵巻を源氏物語絵巻にくらべると、それぞれの場面の雰囲気の写真に欠け、着飾った人形を置いただけといった平板さが目につく。それに同じ引目鉤鼻の人物といっても、源氏物語絵巻における柏木の段などはいかに及ばず、その他の一見非個人的ともいえる表現にも、その人物の性格をうかがわせる描出が見られたのに対し、この絵巻の場合は千遍一律とまではいえないうちに、生き生きとした感じとは凡そ縁が遠い。それに周囲の景物にしても、いたずらに装飾的であって、うるおいにとぼしい。たとえば建物においても安定性が欠け、どっしりとした重さがなく、ぐらぐらとくずれおちそうなもろさが気になる。

さらに問題になるのは、絵と書との調和である。平安時代の作品に見られたような、きめのこまかなうるわしさが、ここにはみいだされない。ひとつには漢字の多さによるものであるが、その漢字が仮名とつり

あいのとれるような、なめらかさをそなえていないため、感じがどぎつくてぎすぎすしている。どうもこの古典的な物語の内容とじっくりしない。

駒鏡行幸絵巻はそれにくらべると、景物また人物などの描写は、一応しつかりしている。しかし、宮廷関係などの表現には信貴山縁起や伴大納言絵詞に見られたような、しっとりとした重厚さが感じられない。それらの存在が没落した事実を反映して、そのような形をとったとも解されるが、庭前の植物も形だけの作り物のようで、切実感が稀薄であるし、人物も型にはまっついて、個性といった要素は全く無視されている。小野雪見御幸絵巻についても、同様なことがらが指摘されよう。

こうした傾向のゆきつくところが、彩色という要素をすっかりうちすてた、枕草子絵巻などの作品である。描写はきわめて細密である。細い墨の描線は、じつと見つめてみると、目がちかちかして痛くなってくる。しかし、そのおどろくべきこまかな描写は、結局物の静止した形に終始している。生命とか動きとかを描きだそうとする意欲は、そこには

まるきり認められないといえる。余情といったそこはかとなき感情の動きは、卒直にいつて私にはつかめない。外形だけへの執着がここまでできてしまったのは、もうどうにもなるまい。色彩とはすっかり離れてしまつたが、こどもの遊びある塗絵のゆきかたと、同じところにゆきついてしまった感じである。事実この系統のやまと絵は、ここで終止符をうたれてしまったのではないのか。

それはそれとして、源氏物語などに題材をとつたとされる、いわゆる目無経も、絵に全然彩色がなく墨の線ばかりであるところは、上述の枕草子絵巻などと同様ながら、建久四年（一一九三）あたりの作と知られるだけあって、墨線の変化にはちゃんと味わいがあり、味も素気もない無表情な、機械的なものではない。この両者における線の差がどうして生まれるのか、そのへんは難かしい問題である。

ところで、もうひとつとりあげたいのは、尹大納言絵詞である。絵としては、枕草子絵巻の亜流であり、格別いうこともないが、その文章の書きかたは、絵のなかにかんりの分量を書きいれているのが、注目される。それは絵巻物として、このましいゆきかたとは、どうしてもかんがえられない。絵のうるわしさを、そこなうものにはかななるまい。このようなゆきかたにまで、もつていったのは、なにが誘因なのであろうか。

説話文学を題材とした作品に目を転じよう。最初に問題になるのは粉河寺縁起である。あるいは鎌倉時代までさげる必要もないかと思われ、信貴山縁起ふうのよさが残っているが、また鎌倉的に墮落する面を多分にそなえているので、ここに取上げることとした。この絵巻の最もすぐ

れた場面として挙げられるのは、娘の病気をなおしてもらつた長者の一家が、紀伊国へと旅立つところである。しとみ戸のある家は、貴族住宅の要素がとりいれられているし、長者一族の服装の様子なども庶民とは縁が遠い。しかし、問題はこの場面にくらべると、もっと下層の人人が多く出てくる場面が、ずっと出来がおちることである。かんじんの千手観音はいく個処も出てくるが、その観音像とともに堂の建物のあつかいがそっくりそのまま、信貴山縁起の命蓮の住房がいろいろと姿を変えてあらわされているのと、およそおもむきがちがう。それはまだしも、堂のまえでくりひろげられている、さまざまなきこの表現がなんと散漫なことか。やはり貴族にちかい生活をおくる人人を描くのはいいとしても、より下層の人たちとなると、筆がとどこおってしまうのではないのか。そういう人たちをじっくり描いた絵巻があまり見られなくなるという傾向が、すでにあらわれていると、いつてよいと思う。

もうひとつ気になるのは遠景描写のつたなさである。ことに杉や松の林のなんと稚拙なことか。もっともこれは、やまと絵の宿命かとも考えられ、前時代に一流の画家が筆をふるつたと認められる、宇治平等院鳳凰堂の九品来迎図の扉絵においても、すでにそのような欠点か指摘されよう。源氏物語絵巻の関屋の段においても同様である。さらに、この時代の作品では、伊勢物語絵巻における富士山のなんと貧相なことか。一遍聖絵はその風景の画法に中国の影響があるといわれるだけあって、その富士山は伊勢物語絵巻にくらべると、まだしもましたが、実感とはおよそ縁が遠い。

小野雪見御幸絵巻や直幹申文絵詞、またなよたけ物語絵巻などの生新さのない型にはまった描法については、格別とりあげるほどのこともないが、それらが鎌倉時代になってつくられた古典的な物語であって、古今著聞集や十訓抄所出の題材を取上げているのが注意される。宮廷関係の説話が限られた範囲の人人以外には注意をひかなくなり、上記の文学書においても、ことがらを記すだけといった、あじけなさを感ずるのであるが、その傾向とおなじような心理が、絵巻の場合にも働いているといえよう。

長谷雄草紙は、これらとちがって、よりどころとされる文献は知られていない。もちろん、それが失われたとも当然考えられる。しかし、いずれにしても、この話は貴族社会の生活と直接につながるものではない。一種の伝奇的な物語である。そこが、画風のこせこせしないおおらかさに、つながるものではないであろうか。

話のすじは、ごく簡単である。詞がなくてもわかるとまでいっては、いいすぎかもしれないが、信貴山縁起飛倉巻のように、絵をずっと長く続けてゆくような方法を、なぜとらなかつたのであろうか。見る人にとって絵をたのしませるうえには、その方がより効果的だともおられるだけに、疑問がもたれるわけである。

住吉物語はなかなかできがいい。型にはまったやりかたではあるが、ちゃんと要領を得ていて、それぞれの場面の情緒がよくとらえられている。いろんな種類の人人が集まって話をしているところも、その楽しさがあらわれているのは、ことにめずらしい。

絵師草紙もなかなか腕は達者である。しかし、いわゆる悪達者で、表現が誇張に過ぎ、含蓄がなく下品である。どぎつくてなまなましい。おなじく下層の人人を描くのも、餓鬼草紙の食水餓鬼にでてくる場面、寺の門前に集まった群集の描写は、くらべものにならないほど、すつきりしている。しがたない生活を送る人たちではあるけれども、安らぎを与えてくれる場にただようゆとりが、これほどまでにえがきだされているのは、まれではなからうか。

將軍塚縁起は、筆にまかせて描きあげたような速さはそれとしても、描写がいかにもなげやりであって、情趣といったものに欠けている。しかし、これは文章が全然ないことを考えると、どうも完成品ではなく下図のたぐいではないだろうか。そうだとすれば、その草草たる筆のはこび、無雑作な細部とともに、白描に終始していることも理解できる。ほかの白描画体の作品とくらべて、そう見るのが適當だと思ふ。

おなじく白描の絵巻に、高山寺のいわゆる鳥獸戯画の丙巻と丁巻とがある。甲乙両巻にくらべると、画技が比較にならないほど劣るのはいうまでもないが、丙巻の前半すなわち人間のさまざまな遊びを描いた部分にしても、たとえば首引きをやる老尼の両足先が相手のかかと近くをおさえて、力がいらないようにしているといった、観察のこまかさも見えるけれども、筆にのびやかさが無く妙にひねこびている。

なお、甲巻と丙巻の後半には、どちらにも猫がでてくる。甲巻の蛙のささら踊りのそばに立つ猫、冠をかぶり扇と尻尾を両手にもって後をふすむく猫には、鼠が兎のかげにかくれないではいられないような、気味

のわるさがよくあらわれている。ところが丙巻の蹴鞠のすこしまえ、木のかげにうづくまうって猿の踊りをみつめる猫は、やはり大きな眼を光らせながらも、無気味なおそろしさはまるで感じられない。のみならず胸のへの描写が、すっかりくずれている。また、甲巻と丁巻とでは仏事という同様な題材をとりあつかった場面を、あらためて引合にだすまでもなかるうが、骨をさすような鋭い風刺と、げすっぽい戯画との差は、一見して明らかである。丁巻においてもやぶさめの所のように、なかなかしつかりした筆法も見られるものの、まとを射る武人にきしつとした集中力が欠けているのは、いかにもものたりない。

男衾三郎絵詞は、めずらしく貴族ふうにあこがれをもつ兄の生活と、弟の武士としての生きかたとが、対比されている点に興味をひくが、両者の対比がいわば表面的で、それぞれの描写に迫力が欠けている。ことに武士の暮らしをとりあげながら、武士らしいきびきびしさが、じつくり描きだされていないのが、いかにもものたりないし、風景も弱弱しくきれいごとにおわっている。

つぎに戦いを題材とした絵巻では、まず蒙古襲来絵詞があげられる。敵軍をまぢかまえるさまさまざまな情景はかなりできがよく、さしせまった緊迫感がでていいる。しかし、蒙古軍と戦う場面および秋田城介をおとずれる場面は、いかにも生氣にとほしい。おそらく待機のところは画家が実際に陣容に接して、その空気から感動をうけたのに対し、後者は聞きがきすぎないという現実感のへだたりが、画致の相違をもたらしただ困かと思われる。

同様なことは前九年合戦絵巻および後三年合戦絵巻についても、いうことができよう。しかたのないことにはちがいないけれども、この時代のごく初期につくられた平治物語絵巻における戦場のなまなましさの表出は、どこへいってしまったのであろうか。それとともに、特に後三年合戦絵巻では、いかにもむごたらしい場面を、あくどく描きだすのに力をいれている。この嗜虐性のでかたにも大きな問題があろう。このようなくどさが、これ以前に例のないことはいうまでもない。

肖像画関係についてみれば、この時代におけるこの種の絵画の発展にともなうて、いくつかの優品がみいだされるが、なかでも出来のいいのは佐竹本三十六歌仙である。いまは一人ずつに切断されてしまったが、元来は二巻にわかれ、たとえば人麿と貫之とを別巻において、それぞれの人物や歌風を比較対照できるように、配慮されていたことがまず注意される。これは巻物という形式をよく生かしたものであろう。各人の顔つきや姿の表現にもなかなか工夫をこらしてある。小野小町を後姿にあらわしているのは、そのいちじるしい例である。

それはそれとして、人物の略伝と詠歌、つぎに肖像と順をおってあらわれ、他巻のそれと相応する効果、しかも前の形が巻きおさめられて姿を消し、焦点がしぼられてくるという、絵巻物ならではの特質が発揮されているのは、まことにみごとである。業兼本歌仙のように図を連続的にならべただけのものとは、くらべものにならないといえよう。それも釈教三十六歌仙のように、おなじく竝列的ではあっても、二人の像の対比があるまとまりをもつたぐいは、まだしもであるが。

肖像画のなかでも、天皇撰関大臣影あるいは天皇撰関影図巻といった、上流貴族のみに関するものは、いかにもつまらない。いろんな顔つきをした人たちが、ならんでいるだけだからである。そのなかにあって、中殿御会図巻は模本ながらおもしろい。構図に変化があるし写実的なかきかたもみどころがあつて、原本の優秀さをしのばせる。

これらとちがつて、隨身庭騎絵巻は上流貴族ではなく馬術という一芸にひいでた人たちだけをあつめ、いろいろと変化のある妙技のかずかずをしめしてあるだけに、生彩かつ変化に富み、絵巻物らしいよさをあじわわせてくれる。やはり模本らしいところもあるけれども、そのゆきとどいた写実は、他に類をもとめがたい。こうしてみると、肖像画関係の作品に対して、いささかほめすぎたきらいがないでもないが、この時代の特技であるだけに、過当のそしりはまぬかれ得るであろう。

和歌の関係については、歌仙絵のことはすでにのべたので、まず西行物語絵巻をとりあげる、描線がほそく、絵のおもむきにどっしりした大きさが欠けているけれども、まつわりつくおさない児を縁からけおとして、家を出るところなどなかなかよい。さらに諸国をまわつて和歌をよむさまざまな場面にしても、風景の描写はこの時代の秀逸なものにかぞえられる。遠くひろがる景をえがくことを筆者はさけているようだが、中景はなかなかおもむきがあるし、近景はことにすぐれている。ただし自然のおおらかさといったものがでていないのは、まぬかれがたい欠点であろう。

伊勢新名所歌合の絵についても、ほぼおなじことがいえる。こまかい

ていねいな描写であり、ひとしくしがたい生活をおくる人びとのすがたまで、とりいれられているけれども、そのたくましさといった面はうかがうことはできない。いままでよりも生活がらくになり、自然は人びとにとつてしたしく、かつ身近な存在になってきたと考えられるのに、それがあらわれないのは、なぜであろうか。やはり和歌とかその世界にあそぶ社会には、自然が身近になったと考えるのが、まちがいなのであろうか。

寺院や神社の縁起では、上記のほかにとりあげられるべきは、まず当麻曼陀羅縁起がある。この絵巻は縦四九cmちかくの大きさであり、北野天神根本縁起とおなじく通例とちがつて、用紙を縦に使つてある。やはり一般民衆にとっては、たやすく見られない種類の作品であつたのであろう。この違例の大きさは、来迎の場面のごときにおいては、なかなか荘厳なおもむきを出し得ているけれども、逆に曼陀羅を織りあげるというかんじんな所では、印象が散漫にながれ効果をあげ得ていない。この画家にはいろいろと労働する民衆にくらべて、女主人公が身心ともにさげきつた、ひたむきの精進をあらわし得ないような、ものたりなきがつきまつていている。

石山寺縁起のうち、この時代の作とされるはじめの三巻は、技法上当麻曼陀羅縁起と同系統に属するとされているが、古くできたものによつたかともいわれるだけあつて、その民衆のすがたには、よりしたしみをもてるところがある。それにさほどこせこせした描きかたでなく、のびやかさがあるものの、やはり見る人の心にしみこんでくるような、じつ

くりした気分が感じられない。

高僧の伝記のたぐいについては、いくつかは前にふれたが、それらのほか重要なものをあげると、まず華嚴宗祖師絵伝がある。義湘と元暁との分にわかれるが、ともに明恵上人にむすびつくものとされている。題材との関係であろう、純日本的な画風以外の筆様がみいだされる。二人の伝記はちがった画家の手になるものとみとめられるが、義湘のほうは、なかなかのびやかな筆ずかいと清新な配色をもつところがあるのに対し、元暁のほうは、おもな人物以外の人びとになると、かなりあらっぽい描きかたが気になる。

ところで、この絵巻にはひとつ重要な問題がある。絵のなかに詞が書入れられたところがあることである。平安時代にそれがどうであったか、まだくわしく調べたことはないが、現存する作品としては、これが最も古い。上記のごとく、この絵巻の製作にあたっては、明恵上人が関係していたとされるのであるが、その製作の過程において、中国あたりの資料がつかわれたのではないかと考えるのは、あながち見当ちがいはいえないかと思う。絵のなかに詞を書入れるのも、そうした例にしたがったのかと、推測される可能性があるということである。

ここで思いだされるのは浄土五祖絵伝である。漢文の詞書からいっても、中国の底本によったと推測されるのであるが、この絵巻には絵のなかに小さなしきりをつくって、人名をしるしてある。華嚴宗祖師絵伝において、たとえば「善妙大師にあひたてまつりてみつからの執心をとくところ」といった、画面を説明する文章ではないけれども、画中に詞を

書入れてある点は共通である。この執心のことは、祖師絵伝の詞書にもちゃんとするされているのだから、重複といえれば重複にちがいない。しかし、その詞書の文章は漢文ではなく、仮名まじりの日本語になっているとはいえず、なかなかむずかしい。一般の人がこの絵巻をひもどいたばあい、すぐさま前の記事をおもいだして、画面の意味をとらえ得るであろうか。そのような心ずかいから、中国の例にならって、内容はちがうけれども、絵の説明を書入れたかと考えるわけである。

しかも、このばあいはごくみじかい文章である。絵をずっと見てゆくうえに、たいしたさわりにはならない。それが画面における調和をそこなうといった程度ではない。かえって理解をたすけるために効果があるともいえよう。外国の祖師の行状を一般に知らせるためには、やくにたつといって、さしつかえあるまい。このようなやりかたについて、明恵上人がどれほどのかかわりをもったのか、私にはまったく見当のつきかねる問題ではあるが。

このように、絵巻物の絵のなかに文章を書きこむといったやりかたは、だんだんにひろくおこなわれるようになった。ついには度をすごして、絵画の効果をそこなうようになった。いちじるしい例のひとつとして、天狗草紙があげられる。なぜそれほど分量の文章が画面にまで、書きくわえられるようになったのか。天狗草紙のばあい、最初から意図されたのか、それとも絵ができあがったのち、詞書ではたりないというので、あとで画面に補加されたのか、だいたいなことながら、その点の検討をまだはたしていない。

しかし、絵が話の内容の表現を注文者に満足させるほど、充分のできばえをもっていないことを、見のがしてはならないとおもう。たとえば醍醐の桜会をえがいた部分である。桜がさきみだれたしたの舞台では、いかにもはなやかに舞臺がくりひろげられている。多くの僧たちは、それにみとれるさまであらわされ、ほかに見物におしかけた民衆を、追いらうにつとめる法師のすがたもある。しかし、このような僧たちのあつかたに対する批判を、絵画のうえで見いだすことは、まるぎりのぞみがない。見るに見かねるありさまをそのままに写しだして、批判をさそうやりかたも、もちろん考えられる。しかし、そこには批判をさそういとぐちが、なくてはなるまい。それがここにはない。

ここで思いだされるのは、鳥獸戯画甲巻において、法事をつとめる猿の僧たちの表現である。いかにも痛烈な風刺が、いたいほど見る人の心につきささってくる。ああいった描きかたは、一体どこへいつてしまったのであろう。あのような描きかたができれば、絵のなかにぶざまに文章を書きいれ、画面の効果をみだすといったことは、やらないですませるとおもう。こんなわかりきったことが、なぜできないのであろう。

結局、絵を描かせる人と描く人とのうちあわせが不充分であった。それがおもな理由ともいえよう。どういう場面をどういうところに重点をおいて描いてほしいのか、そこを画家がきちんと理解していなかったわけである。しかし、また画家が要求をうけいれて、びしっと表現するだけの力がなかったとも考えられる。いずれにしても、文字の書きいれの過大なことが、画面の効果を大きくそこない、ひいては絵巻物のよさを

台なしにしてしまったことはあらそえまい。

以上いろいろと鎌倉時代の絵巻物が生彩にとほしく、つまらなくなつてしまったところをしるしてきたが、その根本はつぎの諸点に要約されよう。

まず、それらを見てたのしむ人びとの範囲が、せまくなったばあいの多くなったことがあげられる。ことに遺品の多くの部分をしめる社寺関係の作品は、それら社寺の宝物として秘蔵されるのを第一の目的としたため、一般の人びととの縁がうすくなった結果かと解せられる。具体的には巻数などの量がいちじるしく膨大化し、その一方に描写がうすべりをして、作者がひとりよがりになった面がでてきたといえよう。また特殊な階層を相手とするので、それらの人びとに関心をもたれるようなことがらを、くわしく説明することに重点がおかれた。したがって絵画として、そこに描かれた内容としたしみのうすい観者に対し、うったえかけてくる魅力が、密度のうすいものになってきたと、いわなくてはならないであらう。事実詞書の文章を読みこなし、ちゃんと意味をつかんで感動する人たちが、どのくらいいたであらうか。

詞の文章について、内容をやさしくくだけ読みやすくすることは、前の時代の宗教関係の絵巻にあつても、はっきりとその志向が指摘される。たとえば地獄草紙の詞は、さほど教養のない人にも、よくわかる文章である。

それに書きかたが妙にくずしてあつたりしてないから、読んでゆくの苦勞がいらぬ。それらはこの時代における仏教関係の絵巻とちがっ

て、なるべく多くの人たちにしようという作品なので、そういう
たちがいでてくるのは当然といえば当然であるが、その点に対する心
ずかいに格段のちがいがみとめられる。見るおもな相手がちがうとばか
りでは、あっさりかたづけられない問題であろう。

もうひとつこれともつながるが、だいじなことは、詞書を書としてあ
じわってもらおうという意識の、うすれである。読めればそれで事はた
りるといった、書きぶりの作品がおおくなった。絵巻における書の美し
さの比重は、いうまでもなくかなり大きい。絵画とちがった美をあじわ
うことは、絵のよさをあらためて認識させるということであろう。これ
でなくては絵巻のよさの破壊である。

詞書の美しさから一転して、それとちがった絵の美しさに目をむけ
る、それが絵巻の特質的なよさである。その半分ともいえるよさが、な
いがしるにされてしまつては、絵巻の本質的なよさはかたわになつてし
まう。ことに巻物という形式では、先行する書や絵のありさまがすつぽ
りとかくされ、まるきり見えなくなつてしまふだけに、がらりとかわつ
た世界があらわれる変化の妙が無視されるようになっては、一体どうい
うことにゆきざきがなるのであろうか。

このばあい詞をまるきり無視しても、それで絵の意味がわかるのであ
つたら、それはそれでいいともいえるけれども、見たくもないような詞
に目をおさないでは、絵の内容をつかめないとなると、詞の書をつま
らなさが、ことさらに感興をそぐわけである。

この書の軽視という現象は、さらにべつなかたちでもあらわれてきて

いる。詞書の量がふえて絵のなかにまではいりこみ、絵の効果を大きく
そこねている事実である。両者の調和どころではない。みごとともいえ
ない書きぶりの詞が、画面に侵入してくるのでは、巻物でもその部分を
巻きかくして、目にはいらないようにするわけにはいかない。絵巻物と
いう形式の二つの要素である詞と絵とのうち、詞が書としての美しさを
しめすことに関心がうすれ、あまつさえ絵のなかに無遠慮にはいりこん
でくる傾向は、あとになるほどひどい例がでてくる。そのような事態に
なつては、絵巻物特有のありかたが根本からそこなわれ、存在の意義が
うしなわれてきて、滅びえの道をたどるのは、当然のなりゆきであろ
う。